

SCCR 第2 聖会  
「御霊による歩み」  
ガラテヤ5:16~25

主題聖句：「御霊によって歩みなさい。」（ガラテヤ5:16）

朗読箇所：16 私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。17 肉が望むことは御霊に逆らい、御霊が望むことは肉に逆らうからです。この二つは互いに対立しているので、あなたがたは願っていることができなくなります。18 御霊によって導かれているなら、あなたがたは律法の下にはいません。19 肉のわざは明らかです。すなわち、淫らな行い、汚れ、好色、20 偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、21 ねたみ、泥酔、遊興、そういった類のものです。以前にも言ったように、今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。このようなことをしている者たちは神の国を相続できません。22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、23 柔和、自制です。このようなものに反対する律法はありません。24 キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、情欲や欲望とともに十字架につけたのです。25 私たちは、御霊によって生きているのなら、御霊によって進むものではありませんか。

始めに

1. 前回との関わり：前回はエペソ書から「御霊に満たされる」事、今回はガラテヤ書5章から「御霊による歩み」がテーマ。

2. ガラテヤ書中での位置づけ:ガラテヤ書は、パウロの宣教活動初期にパウロが開設したガラテヤ諸教会に宛てた手紙。彼らの中に「ユダヤ主義者」達が入り込み「割礼を受け律法を守らなければ本当の信者とは言えない」と教えた為に起きた混乱を鎮めるために書かれた。パウロは「救いは信仰によって与えられるもので、律法遵守によるのではない」と強調。5:1に「キリストは自由を得させる為に私達を解放して下さいました。ですからあなた方は…再び奴隷のくびきを負わされないようにしなさい」との「自由宣言」に基づき、活ける御霊に導かれる信仰生活を勧める。

## A. 御霊による歩みの前提

1. 御霊による生まれ変わり:「御霊によって生きるならば」(16節)は、御霊による歩みの前提を示す。それは聖霊による新生のこと。「御霊によって、死んだ状態から活かされた、つまり、主を信じてクリスチャンとなった事実がはっきりしているなら、御霊に導かれて歩もうではないか」と言う。「あなた方は自分の罪過と罪との中に死んでいた者…しかし、憐み豊かな神は…キリスト・イエスにおいて、共に甦らせ、共に天の所に座らせて下さいました。」(エペソ2:1)。
2. 御霊の満たし:更に「御霊によって生きる」とは、「情欲や欲望と共に肉を十字架に付ける」(24節)事。「情欲を十字架に付ける」とは自然の欲望を罪悪視して、押し殺す事ではなく、欲求満足を第一とする心を十字架につけること。

## B. 御霊に導かれて歩む

1. 御霊により頼む習慣の継続：「御霊によって（御霊に導かれて）歩む」とは「聖霊の感化と指導とに従って歩むこと」（16、25節）。

A. B. シンプソンによれば、「私達の全生命（霊と心と体）の為に、聖霊に依り頼む習慣の連続」。その為に私達の取るべき姿勢は、

- ①認識:内に臨在し、宿り給う友として御霊に話しかける。
- ②信頼:どんな期待にも喜んで応えようと待ち構えておられる聖霊に依り頼む。
- ③相談:聖霊の導きに信頼し、事毎に相談する。
- ④服従:御言に日々接し、その中に主の御心を探り、それに自分を当てはめて従う。
- ⑤同調:主の指差しに、遅れぬよう、早まらぬように、御霊の歩調に自分の歩みを合わせる。これを身につけるためには良心の柔らかさ、敏感さを必要とする。

2. A先生の証し：開拓伝道中のA牧師は、未信者の家族の訪問を断ったが、その理由が真実ではなかった。それを聖霊に示されて、心から悔い改め、信仰に再び立った。私たちが養うべきは、聖霊の導きに気付く sensitivity と、それに従う従順さである。

3. 御霊によって歩む祝福：シンプソンは三つを挙げている：

- ①罪への勝利：「…そうすれば、肉の欲望を満たす事は決してありません。」（16節）
- ②平安と確信:神の御心を行っているという愉快的静けさと安らかさ。
- ③勝利の出会い:人生に起きる全ての事の中に摂理的出会いを感じつつ生きる。

## C. 御霊によって前進する(25節)

16節が「個人的歩み」を強調しているのに比べ、25節は「共同的な前進」(stoichoomen)は、軍隊で列を作っての行進を強調。御霊による歩みは、個人的な営みであると共に、共同的なものでもある。互いへの気遣いと励まし合いに努めよう。

1. 互いに尊敬する (26節): 異なる賜物を持ったお互いへ尊敬がないと「うぬぼれて、互いに挑み合ったり、ねたみ合ったり」する。
2. 互いに謙遜と愛をもって警告する: 「もし誰かが何かの過ちに陥っている事が分かったなら、御霊の人であるあなた方は、柔和な心でその人を正してあげなさい。」(6:1) 過ちに陥った兄弟に対して、陰での批判ではなく、謙遜と愛をもって忠告する。或る人に問題を見たならば、十分な祈りの後、対面で最大限の謙遜をもって忠告をする。もし彼が聞き入れなければ、2、3人の長老と共に同じ勧告をする、それでも聞き入れなければ然るべき方法で懲戒をする、これが聖書的方法。
3. 互いの重荷を負う: 「互いの重荷を負い合いなさい。そうすればキリストの律法を成就する事になります」(6:2) 親身になって、互いの弱さを担い合うものになりたい。

## 終りに

御霊による歩みが齎す実である「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」については、次回に取り上げる。期待しよう。